

研究所報

No. 12

1985. 3. 19.

目次	研究所への期待	1
	昭和60年度「一般研究」	
	選考結果	2
	1984—1985年度	
	パリにおける仏教関係講座	3
	アメリカにおける仏教学の	
	現状(下)	5
	『像法決疑經』の新研究	8
	浄土教における臨終体験	9
	第1回仏教・諸文化国際会議に	
	ついて	11

研究所への期待

大谷大学教授 寺川俊昭

『研究所報』の第10号に、武田武麿所長が発足以来3年をへた研究所の現況を、総括的に報告なさっている。研究所が、大谷大学が「その教育と研究の資質を常に向上せしめるとともに、教育と研究との相関々係を限りなく密接にして行くための努力が、大学自体の責任に於て具体的に促進されなくてはならない」し、「大学が付置の研究所を設けなくてはならない必然性は、このような大学であることの本来の課題を果す、という一点にあるのであろう」と、『研究所報』の第1号に表明された広瀬学長の願いのもとに開設されて以来、運営の任に当たられた各位の非常なご尽力によって、相当の実質をもつ成果を積み重ねつつある現状の報告に接して、改めて深い敬意を表すものである。

研究所のかなり個性的な名称が問いかけている課題、即ち学として相互に独立し、更に国内だけでなく世界的な連繋と広さをもってある諸学が、「真宗」を共通する指標とすることによって、密接に呼応し合う総合性を実現しようとする課題の吟味については、各号の『所報』に載せられた先生方の啓発的なご見解を通して、さまざまの示唆をいただいた。その中に私は、第7号に寄せられた小川教授の「〈真宗総合〉への確認」に、啓発されるところが大きかった。6学科16専攻という本学における学のあり方は、文学部単科の、しかも比較的小規模の本学ではいかにも細分化され過ぎた感があることは否めない。けれどもそれぞれの学が上記のような広がりを持ち、個有の方法と対象をもってある限り、その独自性と独立性も十分

に承認しあわなければならないと思わざるを得ない。従って「真宗総合」という課題をもった時、その「真宗」とは対象を意味するというよりも、小川教授の指摘されるように、「仏教の人間了解」を表わすものとして、学徒一人ひとりの主体性に関わるものと捉える方が、私には理解し易いのである。現在、本学の教員間に有形無形に共有されている大谷大学の個性と伝統への了解と参与への関心が、このような見解に触発されて自覚化していくことを、例えば研究所の仕事への参加を場として、強く期待するものである。

このことに連関して、私の現在の関心は、真宗学と呼ばれる学的探求の学問性を明確にしたいというところにある。いわゆる真宗学と呼ばれてきた¹学、の、学問論的確かめという関心とは、少し違う。そうではなくて、親鸞が²真宗、と呼んだ自覚的世界の真理性の明確化という関心である。この課題的関心をもった時、その推究が従来の³宗学、に連なる、いわゆる真宗学だけで十分であるとは、私には思えない。諸学の知見と成果にまち、啓発されなければ果たし得ない領域があることが、感ぜられてならない。「真宗総合」という名称は、例えば現在の私には、このような課題を投げかけてくる。

現在、「真宗学事研究」や『教行信証』章節の共通表示化への研究」など、意味深い共同研究が進められている。それらの研究を内容の一部として持つような、より包括的な研究、例えば⁴親鸞総合研究センター、的な仕事、が、研究所の継続的な業務として構想できないであろうか。

大谷大学真宗総合研究所

昭和60年度「一般研究」選考結果

昭和60年度の「一般研究」は次のように決定した。共同研究が3件、個人研究が3件である。その内3件は継続である。それらは研究課題の重要性と併せて、研究の進捗状況が加味されて採用された。また、新たな3件の研究も綿密な研究計画にもとづいて所期の目的が達成されようとしており、それぞれ特色ある着実な研究が期待されている。

(A) 共同研究

研究代表者	研究テーマ及び研究組織	補助額
幡谷明教授	「『教行信証』 章節の共通表示化への研究」(継続) 研究員 幡谷明(教授・真宗学) 安富信哉(専任講師・真宗学) 嘱託研究員 藤嶺明信(助手・真宗学) 研究補助員 池田理(大谷専修学院助手) 武田定光(博士課程) 辛嶋静志(東京大学大学院博士課程) 畑辺初代(修士課程修了生) 尾崎秀行 金信昌樹 佐藤智水 鳥越正道 篠原恵信(いずれも修士課程)	100万円
大桑齊教授	「真宗寺院史料の研究」(継続) 研究員 大桑齊(教授・日本仏教史学) 堅田修(教授・国史学) 北西弘(教授・日本仏教史学) 嘱託研究員 上場顕雄(非常勤講師) 研究補助員 片山伸(博士課程)	100万円
多田稔教授	「『オックスフォード運動』の意義とその影響について」 研究員 多田稔(教授・英文学) 内藤史郎(教授・英文学) 鈴木繁一(助教授・英文学) 佐々木正昭(専任講師・教育学) 村瀬順子(専任講師・英文学)	100万円

(B) 個人研究

研究者	研究テーマ及び協力者	補助額
木村宣彰専任講師	「『注維摩經』の研究」	50万円
佐々木正昭専任講師	「真下飛泉研究」	50万円
松村尚子助教授	「保育者養成機関における宗教教育の現状と課題」(継続)	50万円

1984—1985年度

パリにおける仏教関係講座

嘱託研究員 今 枝 由 郎

(フランス国立中央科学研究所研究員)

報告者は1981年からブータン国立図書館顧問の資格でブータンに出張しており、一年の大半をブータンで過ごし、年に1～2ヶ月だけパリにもどって研究成果の報告をするという形をとっている。こうして出張・留守が長いことに加えて、報告者自身の研究対象が、主にチベット・ブータンの歴史であることから、パリに於ける最新の仏教研究の動向について報告をする資格はない。にもかかわらず、表題の報告というよりは“便り”をここに公表するのは、研究所からの依頼があったことと、何よりも、研究所で現在編纂中の「海外仏教研究文献目録」が北米の出版物を一応終え、次には仏文での出版物を手がけようとしているところであり、その編纂作業に何らかの役に立てばと願ってのことである。

どの分野の研究であれ、文献目録が指針として果す役割の重要性は改めていうまでもない。ただし、一つの研究がなされてから、それが公刊されるにいたるまでには、出版事情により差はあるが、少なくとも1～2年を経るのが常である。そして、その出版物が何らかの「文献目録」に載せられ、指針として利用できるようになるのに、また同様な年月が経ってしまう。そうなると、「文献目録」を介して、研究者が、他の研究者の成果・出版物を知る頃には、その研究は既に相当“古い”ものになっていることが少なくない。この点を補うために、最近ではまとまった、完結した形で公刊されたものだけを列挙するのではなく、出版予定のものから、更には現在進行中の研究のテーマなり動向までを含める形の「文献目録」もあらわれている(例えば *Buddhist Research Information*, The Institute for Advanced Studies of World Religions)。これによって、同じ分野に従事する研究者相互の情報交換が一層“同時的”になり、複数の研究者が別々のところで、各々独自に、同一のテーマ・資料の研究を手がけたりするということが避けられ、或は共同研究ということが可能になる。こうした意味で、世界各地で現在進行中の研究・講義なりを知っておくことは、文献目録の編纂作業にとっては重要である。

もう一つ、出版物は研究の“成果”であるが、その成

果をうみ出してくる過程なり組織を知っておくことも重要である。各国ごとに教育・研究機関の組織が異なり、そこで養成される研究者、更にはその成果は、ある意味では、この大きな組織・メカニズムを理解せずには、正しく評価することができない。

以上の理由から、次に講義題目を列挙し、いささか説明を加えることにする。

1) Collège de France, 11, place Marcelin Berthelot,
75231 Paris Cedex 05

ETUDES DU BOUDDHISME

M. André Bareau, professeur

—Aspects du bouddhisme indien décrits par les pèlerins chinois.

—Les séjours du Bouddha à Kapilavastu d'après les textes canoniques anciens (suite et fin).

CIVILISATION JAPONAISE

M. Bernard Frank, membre d'Institut, professeur

—“Mandala autonomes” (besson-mandara) et rouleaux iconographiques.

—Lecture du “Journal de la mère de Jōjin” (Jōjin-ajari haha no shu).

2) Ecole Pratique des Hautes Etudes, IVe Section:
Histoire et philologie, 45–47, rue des Ecoles
75005 Paris

HISTOIRE ET PHILOGIE TIBETAINE

Mme Ariane Spanien, directeur d'études

—La peinture de caractère dans la littérature historique et dans l'art du XVIe siècle.

—La vie secrète du Ve Dalai-lama.

HISTOIRE ET PHILOGIE DE LA CHINE
MIEVALE ET MODERNE

M. Michel Soymié, directeur d'études

—Les débats doctrinaux bouddhiques d'après les manuscrits de Dunhuang.

—Le catalogue des manuscrits, méthodes générales et problèmes particuliers.

EPHE, IVe (suite)

HISTOIRE ET PHILOGIE JAPONAISES

Mlle Francine Herail, directeur d'études

-Les institutions bouddhiques à l'époque ancienne.

-Valeur sociale et politique des nikki ou notes journalières et lecture de nikki du XIe siècle.

- 3) Ecole Pratique des Hautes Etudes, Ve Section:
Sciences religieuses, 45-47, rue des Ecoles
75005 Paris

RELIGIONS TIBETAINES

Mme Anne-Marie Blondeau, directeur d'études

-Découvreurs de textes *gter-ston*) bon-po et bouddhistes: recherche sur une tradition syncrétique (suite).

-La polémique soulevée par l'inclusion de rituels bon-po dans le Rin-chen gter-mdzod.

RELIGIONS ET TRADITIONS POPULAIRES DU JAPON

M. Hartmut O. Rotermund, directeur d'études

-Croyances et traditions relatives à la maladie (l. variole et rougeole).

-Introduction à l'histoire des religions japonaises.

M. Jean-Noël Robert, chargé de conférences

-Les commentaires chinois et japonais du Sutra du Lotus.

- 4) Université de Paris III, UER des Langues et Civilisations de l'Inde, de l'Orient et de l'Afrique du Nord, Centre Censier, 13, rue de Santeuil
75005 Paris

-Licence d'études indiennes

a) Langues

Sanskrit (F. Grimal) et pâli (Nalini Balbir)

b) Littérature et civilisation par les textes

Histoire politique et religieuse. Lecture de textes, F. Grimal.

-Maîtrise et 3e cycle en Etudes Indiennes Philologie bouddhique et jaina, C. Caillat.

- 5) Paris IV Sorbonne, UER de Philosophie,
17, rue de la Sorbonne
75005 Paris

-Maîtrise et 3e cycle

Explication de la Vajracchedika, G. Bugault

- 6) Paris X Nanterre, UER de Philosophie,
200, Av. de la République
92001 Nanterre Cedex

-Initiation à la civilisation et aux philosophies de l'Inde, L. Kapani

-Le bouddhisme indien, sa philosophie, son origine, L. Kapani.

- 7) Institut Catholique de Paris, UER Science et Théologie des Religions, 21, rue d'Assas
75006 Paris

Paul Magnin, Introduction au Bouddhisme.

Denis Gira, Religions du Japon.

上記の内、Collège de France は、各部門におけるフランスの最高権威者による講義で、自由聴講制をとっており、大学制度の枠外にある。

EPHE、第四・五部門は、フランスの大学制度の中では特異な存在である。指導教官の同意があれば、18才以上の者ならば国籍・資格を問わず聴講できる。最初の一年間“聴講生”として列席したあと、指導教官が認めれば正式の生徒となり、diplômeを準備するという非常に自由な制度である。講義レベルは非常に高く、修士・博士課程の演習に類するものである。

パリ大学は、パリ及び近郊のあちこちに分散していて、その組織は巨大かつ複雑である。ただし、原則としてどこの講座であれ licence (学士)、maîtrise (修士)そして 3° cycle (博士)と三段階に分れている。UER (Unité d'Enseignements et Recherches) というのはいってみれば専攻講座で、各学生は指導教官の同意を得て、各段階ごとに UER を選択しなくてはならない。同一大学の同一講座で 3° cycle まで終えることも可能だが、licence, maîtrise, 3° cycle と専攻・所属を変えることもできる。ただし専攻によっては講座が非常に限られており、選択の余地はあまりない。例えば、仏教研究の例をとれば、インド研究講座 (Paris III) か哲学講座 (Paris VI) ということになる。

Institut Catholique はフランスでは数少ない私学で、宗教学講座で仏教関係の講義が行なわれている。

仏教研究が盛んな日本から見ると、全体としても仏教関係の講義が少なく、殊に大学制度の中にも仏教専攻科が存在しないパリの現状は、往時の“フランス仏教学”の伝統がとだえた感を与える。しかも、一つの機関、大学講座なりにおける仏教関係の講義はせいぜい一つか二つと非常に少なく、これで果して学生が仏教を専攻できるのかと、疑問にさえ思えるかも知れない。日本のように一つの学部なりの内ですべてが足りようになっている、いわば“タテ”割りの制度から見れば当然の疑問である。しかし、パリでは“ヨコ”のつながりが自由かつ広く、多様性の中にも全体で一つのまとまりをもった“仏教講座”を形成しているといえる。

一般に学生は特定の UER にて席を置いて学士・修士・博士課程を修業するが、それと併行して、Collège de France なり EPHE なり、いわば厳密な意味での大学制度の枠外にある高等教育機関で、自分の専攻に関連のある講義を聴講する。こうすることによって、相当に

幅広い分野の講義に列席することができる。例えば、Paris IIIのCaillat女史のもとでインド学を専攻する学生は、勿論そのUERで指定された単位なりは修得するが、それと同時に、Collège de FranceでBareau氏の仏教学の講義を聴講し、EPHEの第五部門ではRobert氏の中国・日本選述の法華経の註釈書に関する講義にも席をつらね、同じくBlondeau女史の講義で、チベット仏教にまで手をのばすことができる。

こうして全体から見ると、パリは依然としてヨーロッパにおける仏教講座の中心的位置を占めているといえる。

フランス仏教学の伝統といえば、主に中国語・日本語資料に基いた一大仏教百科辞典“法宝義林”がある。ただし、この作業は京都の法宝義林研究所で行なわれていて、日本ではよく知られているのでここでは触れないことにする。

以上講義を中心に見てきたが、フランスの大学・研究制度はCentre National de la Recherche Scientifique(略称CNRS、国立中央科学研究所)を抜きにしては理解できない。専属研究員一万名を容れるこの組織は、フランスにおけるあらゆる分野における研究の大御所である。研究が主で、原則として直接には教育活動を行わない。ただし研究成果の公表によって教育なり知識の普及・向上に貢献するところが大きい。CNRSには数百の実験所、研究所、研究班があり、各研究者はその専門なりテーマごとにある特定の班なりに属して研究活動に従事する。複雑なのは、CNRSの研究班にはCNRS専属の研究員に限らず、他の機関(大学を含めて)に属する研究者も加わっていることである。

仏教関係の例を挙げるとERA 94 philologie bouddhique et jaina “仏教・ジャイナ教文献”がある(こ

の班の活動に関しては、G. Fussman氏による最近の報告があるからそれを参照されたい。G. Fussman, *Buddhis studies in France*, in *Buddhist Research Information*, n° 10, oct. 1983, pp. 21-29)。この研究班は予算・組織という点ではCNRSに属するが、主任はParis III大学教授C. Caillat女史である。Collège de France教授のA. Bareau, G. Fussman両氏もメンバーとして名を列ねている。そしてCNRS専属の研究員といえばN. Balbir女史位で、彼女は逆にParis III大学でパリ語の授業を出張講義という形で担当している。

もう一つERA 438 *Manuscripts de Dunhuang et matériaux annexes* “敦煌文書及び関連資料”の例をとると、主任はEPHE第四部門の教授Soymié氏で、EPHEでは上記の講義を担当していると同時に、CNRS所属の研究班の研究総括をしている。この班にはCNRS専属の研究者が数名おり、その内の一人P. Magnin氏は、Institut Catholiqueで出張講義をしている。自分の例を挙げて恐縮であるが、報告者自身もCNRSの研究員で、このERA 438班に加わっている。小生の場合は講義は担当しないが、最初に述べたように、出張という形でブータン国立図書館での作業に従事している。

こうしてフランスの高等教育・研究制度は、CNRSと大学という二本柱が、相互に密接な関連を保ちつつも、各々主に研究・教育と任務を異にしている点が特徴的である。

以上、講義題名を列挙するだけで内容にまで立ち入ることがない表面的な“便り”で、全体としてもまとまりのないものになったが、フランスにおける仏教関係の講座、大学・研究組織の理解にいくらかでも資するところがあれば幸いである。

『海外仏教研究』研究会報告(要旨)

日時：昭和58年6月29日(水)

場所：研究所会議室

〈指定研究〉

アメリカにおける仏教学の現状(下)

京都産業大学 一郷正道
教 授

主としてNDEAのスカラシップの恩恵のもとに育ってきた学者にとって、現在、アメリカ全土において幅広い仏教学が講ぜられている。これら学者が中心となって二つの仏教学会が組織されている。The International Association of Buddhist Studies (IABS)とThe

North American Society of Buddhist Studies (NABS)である。前者の本部はウィスコンシン大学にあり、R. J. Millerが会長をつとめる。この第六回総会が、一昨年八月に東京、京都でCISHAANに関連して開会されたことは記憶に新しい。このIABSは*The Journal of*

IABSを発行して学界に貢献している。但しこの学会は、その学会名が示す如く、国際的であり、非常に幅広い研究分野の学者を会員としている。そういう学会に満足せずもっと密度の濃いものを、しかも国内で行ないたいという意図の下で発会したのが、後者のNABSである。これは、L. Lancaster, L. Gómezを中心にパークレーにその機関がおかれている。しかしこちらの方はニューズレターを発行する程度で目立った成果はまだ現われていない。

アメリカの仏教学者のリストを一瞥したとき、Ph. Dを出している大学として、ハーバード、エール、コロンビア等の伝統的に東洋学の確固たる基盤を持つ私立大学の他に、ウィスコンシン大学の存在が目立つ。ウィスコンシン大学の仏教学研究講座は、夭逝を惜しまれたR. H. Robinson教授在任中にできたものである。仏教プログラムプロパーでPh. Dを出すことのできた最初の大学であった。当時は、故E. Conzeや、今はコロンビアのA. Waymanも滞在し、日本から長尾、梶山の両教授も出講され大いに支援された。そのウィスコンシン大学から最初にPh. Dを取得したのが今パークレーにいるL. Lancasterであり、二番目がブリティッシュ・コロンビアにいる飯田正太郎氏であった。そして現在でも、現代インドの研究をも含めてこのウィスコンシン大学がアメリカにおけるインド学仏教学研究のセンターであることはまちがいない。あの大学の図書館地下に眠る歴大な資料を見たならば驚かざるをえない。

このウィスコンシン大学をはじめその他の州立大学が苦しい経済的客観状況の中から、さらにインド仏教研究を発展向上させてもらいたいものである。というのも、仏教思想研究という領域に限って見た場合に、アメリカの仏教学の研究の方法論にいささか物足りないものを感じないではない。「ときとして、自分が言語学者にもなりきれず、哲学者に徹してもいけないことを自覚させられるときには、気落ちした自分をなぐさめるすべもない」(梶山雄一『空の思想』228頁)という仏教学者の述懐すら自覚しない学者が増えているのではないかという気がしてならない。今、アメリカに於ける仏教学専攻の学生の就職難は、日本以上にきびしい状況にあるといえよう。その原因は、何といっても経済不況にある。それと同時に、アメリカの大学は、私学は別にして、東洋学の伝統がない州立大学における学問の隆盛は、時世に大きく左右されるという事実にあるともいえよう。朝鮮、ヴェトナム戦争を経験している間は、その必要上、アジアへの関心が高まり、政府はどんどん金を出す。金が出ればそこにたくさんの学生が集まり、自ずと陶冶された立派な学者が育つ。しかし戦争が終了すれば、日本とちがって講座制をとらない、或いは、たとえとったとしても、毎年の教育予算が時の世相を反映して変わる州立大学では、そういうプログラムは維持できなくなる。その結果、

優秀な学生は集まらず、勢い立派な学者は育たない、という悪循環をひきおこす。さらに、文献学的方法による仏教研究は、アメリカではこれ以上育たないのではないかという危惧さえ感じられないではない。文献学的仏教研究のためには、梶山教授の言をもってすればSkt. Pal. Tib. Chi. Jap. Eng. Ger. Fre.の八つの語学の習得が必要である。しかしこれは日本人だけでなくアメリカ人学生にとっても容易なことではない。語学習得に要する長期間の生計を助ける奨学金が減少すれば、そのような方法論を身につける学生は育たなくなる。よしんばそのような方法論を身につけた学生が生まれたとしても、今度はそういう学生の就職の門戸が閉ざされているのが現実である。アメリカの就職人事においても、一種の、日本流オールドボーイシステムが段々と広まりはじめていないともいえぬ現実がある。こうして、文献学に基づく仏教研究が、アメリカの地から失なわれねばよいがと心配である。

序でながら、幸いにもミシガン大学滞在中交流を深めた、アメリカを代表するといっても過言でない二人の若い仏教学者を紹介しておこう。L. O. Gómez氏とG. Schopen氏(今はインディアナ大)である。

プエルト・リコ出身でスペイン語を母国語とするGómez氏は、ドイツ語の習熟が東洋思想、とりわけ仏教への興味をひきおこすことになったという。エール大学に進み、skt. をP. Tedescoに、また、P. Mus, J. Rahderのもとでインド学、仏教学を身につけた。彼こそは、正に八つの言語を駆使できる貴重な仏教学者といえる。単に言葉をこなせるだけでなく、仏教のもつ宗教性の理解も深い。浄土教、親鸞教学への関心の深さも近年の書評(Shinran's Faith and the Sacred Name of Amida, *Monumenta Nipponica*, Spring 1983, vol. 38-1)で証明済みである。

次に、当研究所で報告させていただいている関連からも、浄土教研究の方法論に新しい面を提示したG. Schopen氏の紹介に移る。彼は、Gómez氏からskt. 文法を学び、その後カナダで広島大学の桂氏からTib. 文法を習っている。Conzeの本に誘発され、『般若経』に関する所論をde Jong氏に送付したところ、それが注目されてオーストラリアへ招かれ本格的に仏教研究に入る。そこで彼の取得した学位論文は『薬師瑠璃王経』の研究であった。彼は、とくにプラークリット(俗語)で書かれた経典や碑文を読解しては仏教の思想を明かそうとしている。その成果の一つにSukhāvati as a generalized religious goal in Skt. Mahāyāna-sūtra literature (*IJ* vol. 19, 1977)という論文がある。この論文は、極楽往生ということは阿弥陀信仰とは関係なく、もっと一般的な宗教上の目標にすぎない、ということを様々な経典の記述をもとにして論ずる。たとえば、『薬師瑠璃王経』では、比丘、比丘尼、優婆塞・優婆夷は八齋戒と学処を

身につければ誰でも極楽へ生まれることができる、と書かれてある。あるいはまた、聖典を護持する、書写する、聴く、唱え敬う等を通じて極楽往生が可能である、とされていたことを論証する。さらにまた、「極楽」という表現は、ちょうど「スメール山の如し」という表現が、不動な状態、冷静な状態を示す比喩的表現としてあるように、壮大さ、美しさ、魅惑といった言葉の文学的喩例として使用されている事実を經典の中に発見してゆく。彼は、六世紀頃には編纂されていたと考えられるギルギット写本に含まれる經典を多く利用する。その一つである『三昧王経』の成立は、『八千頌般若』との関係からすれば、二世紀頃までさかのぼれるとされる。その經典にも極楽往生は阿弥陀信仰とは関係のないことが示されている。とすると、成立がほぼ同時期と考えられる『大経』に記述される極楽往生という考え方も、必ずしも阿弥陀信仰に基づくものではない。当時、民間に広まっていたインド人の考え方がたまたま『大経』にも取り入れられたにすぎない、というのが Schopen 氏の結論である。彼が示す文献に関してだけ申せば、反論の余地のない説得力に富んだものである。

日本におけると同様に、アメリカでも大学というアカデミックな場所を中心に伝えられる仏教と、一般市民の間に信仰として広まっていく仏教とが存在する。その両者のへだたりは日本の場合よりも小さいのではないかという印象をもつ。そもそも州立大学を中心とした東洋学、とりわけ仏教学というものは、科学対宗教、あるいはキリスト教対仏教という問題意識において受容され、社会の変化に応じて支えられているという歴史的事情に因るといえよう。その上、大学の場で仏教研究の方法論に文献学的方法を採る学者が少なくなれば、その傾向はますます強まってゆくであろう。

その民間の仏教活動は実に活発である。私が滞在したミシガン大学のある人口約十万のアンナーバーという町にも、数多くの仏教の活動グループがあった。たとえば、チベット仏教に関するグループだけでも、ゲルク派、サキャ派、カーダム派とそれぞれ別である。禅のグループは、日本の臨済、曹洞禅のみならず、中国禅、韓国禅のグループもあるといった具合である。さらに、日本の宗派の伝統教団の活動は言うまでもなく新興宗教のそれより活発である。こういう市民の宗教活動を通じて、仏教はアメリカに浸透してゆき、アメリカナイズされた仏教が芽生えてゆくことであろう。例えば西海岸のパークレーにある東本願寺別院（我々の友人である今井師が輪番を勤める）でもそういうことはいえる。今井師夫妻は、

日曜礼拝の際、必ず一時間程前には黒人たちに座禅の場を提供する。内陣に座布団を敷き、そこで瞑想の場を与える。それがおわると、今度は本願寺の信者に英語なり日本語なりで説教をする。東本願寺の別院であるから坐禅をしてはいけないとは言えないであろう。かれらの採っている方法はきわめて賢明であり、それこそがアメリカにおける仏教の現実である。

しかしながら、注意しておかねばならぬことは、そういう市民グループの活動は、きわめて栄枯盛衰が激しい、ということである。あの一九五〇年代に台頭した、貴大学の長崎先生もよく御存知のスナイダー、ケルーアックというビートニック詩人たちの禅グループは今やどこへ行ってしまったのかわからない。何らかの形で地味に根づいたのかもしれないが、二十年以上経てそのまま残っているということは少ない。そうあればあるほど、アメリカの仏教学界、乃至仏教学者がなすべきことは、オーソドックスな、伝統的な仏教思想はこういうものであったということの後世に残す仕事であろうかと思う。

かつて世界宗教会議が問題とした科学と宗教、キリスト教と仏教、ひいてはいわゆる文化の伝播の問題、それにいかに答えていくかが課せられてくる。それは結局、翻訳作業に依るしかないであろう。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、フェノロサ等を中心とした東海岸のボストンの連中は、the play of the intelligent によって文化の伝播に責任を果たしたのである。では知的遊戯が具体的に何を指すかといえば、それは翻訳作業であろう。そして、翻訳ということには、エリオットが指摘するように、二つの意味がある。一つには、同化されてしまうかもしれない新しい要素を持ちこむことであり、二つには伝統的な文学方法では忘れ去られていた重要なものを回復することである。その翻訳のプロセスにおいて、オリジナルな精神と翻訳者との間に幸せな融合が生まれる。その成果は決してエキゾチックなもので終らず、むしろ、もう一度復活させるはたらきをもたらす。(T. S. Eliot; "The Noh and the Image," *Egotist* IV, August 7, 1907)

このような、翻訳という極めて地味な活動を通じてこそ文化の伝播は可能になるのではなからうか。実は、そういうことこそアメリカの仏教学者も心すべきことではないかと思う。その意味で、近年、カリフォルニアで行なわれたデルゲ版チベット大蔵経の出版は大業績だといえるし、日本人学者も参加するであろう大正新修大蔵経の翻訳事業も学的価値の高いものであってほしいと念ずる。

日時：昭和59年10月25日(木)

場所：研究所会議室

『像法決疑經』の新研究

カリフォルニア大学
デービス校教授 ウェイレン・ライ

Dr. Whalen Lai

Professor, University of California at Davis

『像法決疑經』は既に幾人かの著名な日本の学者によって研究されてきているが、私はここに新たな視点から、このテキストの成立が五一七年から五二〇年の間であり、またこの經典が、北朝仏教教団における重大な変化に対する歴史的証言であることを明らかにしたい。

この經典は序章、本章、結章の三段から成る。本章では、曇無讖訳『優婆塞戒經』に基づき、俗人による物質的寄進のことでありと理解された布施論が説かれるが、これは涼州で創始された人天教、すなわち、人あるいは天として再生するための「因果応報仏教」的なものである。また結章では、本章での「因果応報仏教」の枠を越えた鳩摩羅什的、南朝空觀仏教的教説が説かれている。これは、この經典の作者が、涼州の曇無讖の伝統に属しているが、「南朝」仏教が流行し始めていた洛陽に、後にやって来た人物であることを示している。

『像法決疑經』は五一七年から五二〇年の間に洛陽で成立したものである、と私は考える。私の考えでは、この經典は、仏滅後千年を幾分過ぎた頃のものとして設定している。五二〇年に洛陽で行われた道家との論争において、仏滅の年は紀元前九四九年と定められたのであり、それによれば、六世紀は仏滅後千年とはならないのである。もし『像法決疑經』が五二〇年以降に成立したものであったのならば、そのような新しい合意を無視しえたはずがない。それ故に、この經典の成立は五二〇年以前のことと考えられねばならない。また、この經典が五二〇年以降に成立したものであるとすれば、菩提流支の翻訳からの何らかの引用があってもよいはずであるが、それもこのテキストには全く見あたらない。さらに、五一七年に朝廷に提出された陳情書には、洛陽における寺院の急増を攻撃する一文が述べられるが、それとほとんど同一の言回し（「或在巷路臭穢患處」）が『像法決疑經』の中に見出される。陳情書の、そのような趣旨は五一七年の詔で公布されており、『像法決疑經』はこの詔の知識を前提としているのである。それ故、その成立は五一七年以降のことでなければならない。このように『像法

決疑經』の成立年代を決定することにより、この經典の、仏教教団の墮落に対する批判を六世紀初頭の社会的・歴史的状況の中で理解することが可能になるのである。

『像法決疑經』は、洛陽の新しい都市寺院の信仰の中にあり、かつそれに拠っていた仏教教団の墮落に対する批判の記録である。この研究で、私が基本的に主張したいのは、この經典は僧祇戸の理念が失われたことを嘆いているのだ、ということである。曇曜は四六〇年に、貧民救済の福祉事業のために僧祇戸の設置を願い出て、許されている。彼は更に、寺院での私的使用を目的とした仏図戸をも創設している。前者は『優婆塞戒經』における貧窮田（仲間、とくに僧伽を助ける為の）に相当し、後者はその福田（三宝、特に仏陀を讃える為の）に相当するであろう。曇曜はここで、三宝分離の原則に基づき、すべての粟は僧祇粟であって仏粟ではないということを確認しているのである。しかるに、やがて僧祇戸の理念は忘れ去られる。僧祇戸は教団に新しい富をもたらし、教団は五世紀後半以降、富裕化し、墮落して、浪費的な洛陽寺院の信仰を現出するに至る。『像法決疑經』が記すように、人々による盛んな仏塔起造や仏塔への寄進は、仏宝が僧宝を圧迫する様を伝えるものであり、あるいは、農村の僧祇戸は、都市官吏による農村の財産の収奪によって、危機に直面していたのである。また都市にあって、俗世の有力者は、彼ら自身の私的な利益のために寺院を建立したのであり、その結果として、人々は他人の個人的功德のために建てられた寺院を再建しようとはしなくなる。『像法決疑經』はこのような農村の共同体意識、すなわち、「戸」の意識、の喪失を嘆いているのである。この經典の作者は、洛陽の新しい都市寺院の信仰を批判する時、一方で、かつて涼州で行われていた遊行・乞食の古い生活用式を想定しているのである。しかしながら、皮肉なことに、「世俗都市」—世俗的な寺院—は大乗仏教の社会・経済的基盤でもあり、また、僧団（僧伽）の犠牲において仏陀を讃歎する仏塔信仰（仏塔への寄進）も、大乗精神の重要な要素なのである。大乗仏教の居士

は僧伽の仲介を経ることなく、直ちに仏陀へと到ることができ、更には彼ら自身の菩薩がナを建立することさえできるのである。

『像法決疑經』の批判の不完全さは、やがて修正を受けることになる。この經典の愛する古き良きものと、洛陽の都市的・大乘の状況という新しい現実とを結びつけることは、三階教の信行の仕事となるのである。

※「海外仏教研究」では、昨年十月、ウェイレ

ン・ライ教授を迎えて、「像法決疑經について」と題してご講演いただいた。これは、その折の発表に用いられたペーパーのレジメである。なお、この内容を敷衍し詳説するライ教授の論文が、真宗総合研究所『研究所紀要』第三号に掲載される予定である。

(文責：「海外仏教研究」室員)

『海外仏教研究』研究会報告

〈指定研究〉

日時：昭和59年11月21日(水)

場所：研究所会議室

浄土教における臨終体験

大 阪 大 学
フルブライト交換教授 カール・ベッカー

Dr. Carl Becker

十三年程前、私はハワイ大学、イースト・ウエスト・センターの大学院生であった。大学院で坂東先生などのもとで仏教学を勉強する傍、ハワイ大学キャンパスの斜め向いにある、B.S.C. (本願寺仏教学習センター) で図書当番を勤めた。B.S.C. には様々な学生や若い一般市民が出入りし、仏教に関する質問をしたり勉強をしたりする。当番として、私は『歎異抄』を初め、数多くの真宗関係の文献を来訪者に紹介した。又、真宗に関する様々な質問を受けた。若い人々が最も関心を持ち、繰り返し問いかけてきたのは、次のような点に関してであった。

- 1 真宗の信仰の対象は何なのか。
 (2) 阿弥陀は生きているのか。生きているとすれば、どこに居るのか。
 (3) 浄土と言うが、浄土は実際に存在するのか。それとも人間の苦しみを慰める為の比喩的神話、もしくは人間の想像にしか過ぎないのか。
 (4) 仏教は輪廻思想に基づいている。真宗は極楽往生、つまり来世の存在をその信仰の拠り所としている。では、輪廻、往生、来世等が確かに存在するという証拠はあるのか。
 (5) 信じれば救われるという点では、真宗はキリスト教とよく似ている。これは、キリスト教その他の中近東の宗教の歪んだ伝統ではないか。

これらは、容易に解決できない問題点としてずっと私

の頭に残り、仏教をより深く研究する動機にもなったのである。

考えれば考える程、これらは現代人にとって宗教的に重要な問題であると思える。阿弥陀が生きていなければ、「他力」は無意味になろう。浄土が存在しないのならば、親鸞聖人の信仰を初め、真宗の教えが皆間違に基づいているということになろう。確かに、来世が無ければ、つまり死がすべての最後であるならば、往生も有り得ない。輪廻が無ければ、宇宙の正義、そしてすべての苦しみも無意味となり、仏教哲学も全く違ったものにならざるをえない。宇宙の意義と正義とを信じたければ、来世をも信じるしかない。この一生限りの宇宙ならば、存在主義者のいうように、どう考え、信じ、行動しようとも、結局すべて無意味に終る。真宗は、これとは逆に人生や行動、信仰を大切にし、その中から意味を見出そうとする。だが現代人はもはや神話だけでは満足しない。来世が存在するという証拠、それが無理なら、それを多少とも裏付けるようなものはないか、と求めずにはられない。

浄土教の歴史を溯ってみると、阿弥陀や浄土を体験したという祖が少なからずある。中国に於ては、4、5世紀頃、廬山寺の慧遠が瞑想によって阿弥陀を見、白蓮社の祖となった。白蓮社の中には、死ぬ直前阿弥陀の来迎を見た人が何人も居たと記録に残されている。

曇鸞が51、2才の時病気で死にそうになり、その時金

の門を見たという話はよく知られている。その後すぐに病気が直り、曇鸞は千何百キロも南方の廬山まで歩いて赴き、大変な苦勞の後に道教のお経を授かった。ところが北に帰る途中に菩提流支に会い、道教の経を捨てて觀無量壽經を得たという。この有名な出会いをきっかけとして、浄土念仏や阿弥陀の彫刻が広く知られる様になった。道綽も老年の病の床で幻想を見、その後回復してさらに18年程浄土教の布教に努めたという。道綽、善導、法照等、中国の名祖は皆、觀無量壽經も語る様に冥想によって、自由に浄土に出入りし、阿弥陀を見ることができた記録されている。

日本の浄土教の背景となる比叡山の天台宗を振り返ってみても、冥想が中心的な役割を果たしていることを否定できない。中でも、源信の『往生要集』や数多くの来迎図、良忍の融通念仏、そして法然上人の夢の日記等が、それぞれの上人の冥想による浄土経験を生かしている。

そこまで冥想ができない一般の信者でも、自分で阿弥陀や浄土を経験できる方法が一つある。それはいわゆる臨終体験である。死ぬ直前に阿弥陀の来迎を見たり、死んで暫くして復活した者が、死んでいた間に浄土を経験したと語ったという記録は、中国に於ては5世紀から現在に至るまで見られる。日本でも、『日本霊異記』、『日本往生極楽記』、『扶桑略記』、『今昔物語』、『宇治拾遺物語』等の中で、そのような臨終体験が数多く語られている。無論、これらの記録がすべて事実だということではない。しかし、人物名、日付や時期、場所、状況が子細に報告されているものについては、すべて嘘だと断言する訳にはゆかない。昔から伝わる体験談をより正確に解釈する為に、現代医学の臨終体験の研究を参考にしてみよう。

国際臨終研究会の本部があるコネチカット州立大学を初め、米国、ヨーロッパ、インド等の数十ヶ所の大学や州立病院が、臨終体験を研究している。これまでの研究によって、臨終体験が次の様な共通した特徴を持つことが明らかにされている。

- [2](1) 臨終体験において経験された幻想は、ほとんど宗教的偶像、あるいは、既にこの世を去った親戚の人についてのものであり、他の幻覚が、生きた人間についてのものであるのと異なっている。
- (2) 臨終体験における幻想は、他のありふれた幻覚が無目的であるのに対して、人をあの世へ送るといった目的を持っている。
- (3) 臨終体験の幻想は「間主観的」である。
- (a) それらは、当人の宗教的背景や信条のいかんにかかわらず、共通の内容を持つ傾向がある。
- (b) 臨終の人を「来世に導く」と見られる幻想は、その場に居合わせた人々の目に映ることが

ある。

- (c) 臨終体験の中で、それまでに当人や居合わせた人たちが知らなかった情報を獲得することがある。周囲の人がそういう発言を疑うが、後になって、その話の内容が真実であると判明することがある。
- (4) 臨終体験における幻想は、患者がそれまで付きまわっていた疾病から患者を一時的にせよ永久的にせよ解放し、当人の気分を高揚させる。

臨終体験を医学的にコンピューターで分析した報告によると、各々の臨終体験の間にも、また臨終体験と患者の宗教的訓練、期待、身体の状態の間にも、関連を見出すことはできなかったという。

浄土の宗教的体験と、西洋の病院における多数の臨終体験の報告の間の類似性が示唆しているのは以下の2点である。

- [3](1) この現象は一般に考えられているよりも普遍的であるかもしれない。
- (2) これまで単純に、聖人言行録として軽視されていた要素のいくつかは再考されなければならない。それは、同様の現象が管理された状況下でも繰返し観察されているからである。

科学者達は、これらの現象を生理化学的に証明する為の探求を続けている。「脳死」と判定された後においても意識が回復することがあるという証拠が増加しつつある。また、脳がはっきりと等電位（機能停止状態）になった時の経験を報告している学者もいる。神経生理学的な脳の活動とは全く独立して意識が存在することもありうるわけである。

華嚴教の唯心論に基づく天台宗、浄土宗、真宗等の思想にとって、これは極当たり前のことである。この世も、極楽浄土も意識の働きの結果生ずるものであり、意識は物質よりも根本的で永続的であると考えからである。来世の存在は、霊が身体よりも永く生き残ることを大前提としている。より具体的に言うと、浄土は客観的に存在しているが、その客観的な浄土は阿弥陀の願力で作られているのである。

無論、浄土や阿弥陀は、この世とは全く別の次元一意識の次元一に存在するのであるが、觀無量壽經に書かれている様に、冥想によって、あるいは臨終に際して、我々の意識があつた世と接することが可能である。科学によって来世の存在を証明するには至っていないが、最近の臨終研究は、昔からの伝統と信仰とを考え直させてくれる。

* * *

完全な答にはならないが、ハワイ大学時代の若者の質問に対して、いくつかのことが言えると思う。様々な歴史的な祖の伝記や信者の記録の中に、阿弥陀や浄土を経験したという記事が数多く見られる。それらは大体冥想

と臨終との二つで、その方法は観無量寿經の語る通りである。研究を深める余地はあるが、「こんなことはありえない。」と否定することはできない。そして、このような宗教的体験が、キリスト教等のことを全く知らなかった慧遠や曇鸞等の報告と合わせて、阿弥陀や浄土教が、中国や日本に独立的に存在し得た、ということの裏付けと成る。文化的影響は大いにありうるが、瞑想的な、

或いは臨終的な宗教体験が浄土仏教の根元にあることを忘れてはならない。親鸞以来、真宗の信者は余り瞑想に頼らない。浄土を瞑想で経験していなくても、浄土の存在を確信し、阿弥陀の本願力を頼りにして、死んでから自分の友人と出会うことを、親鸞聖人と同様に、期待することは出来る。

『海外仏教研究』

〈指定研究〉

第1回仏教・諸文化国際会議について

研究員 箕浦恵了
本学教授

(西洋哲学)

仏教と諸文化とに関する第1回国際会議 (First International Conference on Buddhism and National Cultures) が昨年 (1984年) 10月10日から15日まで6日間インドのニューデリーで開かれた。この会議はインドの諸研究機関 (Indian Council for Cultural Relations, Indian Council of Philosophical Research, Indian Council of Historical Research, Indian National Advisory Committee on Buddhist Studies) がスポンサーとなって開かれ、41ヶ国から約400名の参加者を迎え、なかなかの盛会であった。会場には市内の国際会議場 Vigyan Bhavan が用いられた。その大ホールで行なわれた開会式は荘厳な仏教讃歌で始まり、続いてこの会議の代表であるアーンドラ大学の哲学者 K.S. ムルティ教授が開会の挨拶を述べたあと、今は故人となったインディラ・ガンディ前首相、カウル教育文化相が演説した。そのあとジャイプールの歴史学者 G.C. パンドゥ教授 (*Studies in the Origins of Buddhism. Foundations of Indian Culture* などの著作がある) が司会者になり、中村元教授、中国社会科学院の任継愈教授、モスクワ東洋学研究所の青年学者の V.P. アンドロソフ教授、*The Central Philosophy of Buddhism* の著書によって著名な老大家 T.R.V. ムルティ教授らの講演があった。中村教授は Buddhist Oecumenism and National Cultures という題の講演を、任継愈教授は Buddhism and Chinese Culture という題の講演を行ない、また T.R.V. ムルティ教授は、遙か極東の日本にまで伝えられ、それぞれの地で多様に発展した大乘仏教の根幹をなす哲学の oecumenical な意味を強調して語った。

インディラ・ガンディ首相は参会者に向けて、非暴

力・謙虚・寛容という仏陀の教えに従うべきことを訴えかけた。緊張と対立とによって今日世界はひき裂かれてしまっているが、このような時代にこそわれわれは仏陀の教えを想起しなければならない。困難な時代にこそ人は仏陀の教えにある通り「自らを灯とし」、われわれの内に内在している資質と能力とを引き出さなければならない。そうしてわれわれの内に在る知恵の灯を、非暴力の謙虚を、慈悲の灯を明るく輝かせよう、と訴えかけた。きわめて印象深い開会式であった。この国際会議開催の意図は、学的な仏教研究に基づいて、仏教の Oecumenism を明らかにし、非暴力と平和とを問い求めることにあるのだということが感じられた。日本からの参加者は中村元教授のほか奈良康明教授、常盤義伸教授ら数名であった。

会議のやり方は、11日から14日まで4日間7つの部会 (① Buddhist Oecumenism and National Cultures, ② Philosophy, ③ Religion, ④ Architecture and Arts, ⑤ Socio-Economic Ideas and Institutions, ⑥ Forms of Worship and Meditation, ⑦ Literature) にわかれて、午前・午後それぞれの部会において代表講演ないしは研究発表と討論を行なうというふうであった。代表講演には韓国東国大学の李箕永教授 (Buddhism and National Culture in Korea)、米国コロンビア大学の A. Wayman 教授 (Buddhist Meditation)、ソルボンヌ大学の G. Bugault 教授 (The Uniqueness of The Buddhist Way of Thinking and Its Encounter with West To-day)、アーンドラ大学の K.R.Rao 教授 (Early Buddhist Psychology of Transcendence)、デリー大学の M. Tiwary 教授 (Socio-Economic Ideas in Early Buddh-

ist Scriptures)、カルカッタ大学の S. Bhattacharyya 教授 (Some Unique Features of Buddhist Logic) らがすでに印刷されたテキストを配布して講演した。最後の日には参加者は再び大ホールに集って K.S. Murty 教授が締めくくりの演説を行ない、アルゼンチンの Carmen Dragonetti 教授ら数ヶ国の人たちが会議の意義を讃え、主催者への謝辞を述べた。今日では仏陀の教えはアフリカや南アメリカにまで届き、世界各地から集った人々が今こうして一つの言語で仏教について語りあうことがで

きることは素晴らしいことである、と結んだ Dragonetti 女史に盛んな拍手が送られた。

会議を実りあるものとするため K.S. Murty 教授、G.C. Pande 教授、L. Chandra 教授、D. Krishna 教授、M. Tiwary 教授、S. Rinpoche 教授らが周到な配慮のもとに準備した Working Paper は小冊子ながら仏教研究の主要問題を摘記した立派なものであると感じた。考えさせられることの多い有意義な会議であった。

研究所行事

12月以降の研究会は次の通りであった。

真宗学事研究 研究会

12月14日(金) 「日本近世における民衆教育の性格」
津田秀夫氏
(関西大学教授)

海外仏教研究 研究会

2月20日(水) 「インド仏教における一切智の概念の発達」

Alexander Naughton 氏
(真宗総合研究所客員研究員)

編集後記

今号は、昭和60年度「一般研究」の選考結果の報告と共に、寺川教授から頂戴した「研究所への期待」を始めとして数編からなっている。「海外仏教研究」において開催された研究会の中、その内三編の報告(要旨)、更には、御多忙の中にもかかわらず寄稿して下さった箕浦研究員、並びに、今枝由郎嘱託研究員の報告二編を掲載することができた。厚く御礼申し述べたい。

『研究所紀要』第2号(昭和58年度研究報告)も発刊の運びとなった。総頁三百有余頁という大冊となったが、述べるまでもなく、量をもって世に問おうとする性質のものでない。『紀要』第2号の内容は次のとおりである。

蓮宗寶鑑の研究——本書の背景、意図と歴史的意義——

安藤 智信

草創期中国華嚴学派における起信論の受容について

織田 顕祐

外国語教育(学習)の思想……………岩見 至

友田 孝興

市橋 弘道

禿 憲仁

安富 信哉

光遠院恵空講師略年譜……………経隆 優

史料紹介『上首寮日記』……………真宗学事研究資料班

昭和五十八年度 研究所報告

執筆者紹介

The Four Extensive Vows and Four Noble Truths
in T'ien-t'ai Buddhism………… Robert F. Rhodes

『現観莊嚴論』の註釈文献について……………兵藤 一夫
日系アメリカ人の教育意識に関する研究……………田中圭治郎

* * * *

なお、昭和58年度「一般研究」の研究成果の一端として、「大谷大学所蔵蔵外西藏文献目録総索引」(仮称)の原稿(予想頁250)が既に提出されているが、印刷の都合にて来年度に発刊される予定である。

また、『西藏大蔵経丹殊爾勘同目録』の続刊は今年度から当研究所に移管したが、年度内の発刊に向けて、第7分冊に相当するII-1(般若部・中観部)の校正が目下進められている。(片野)

研究所報 第12号

1985年3月19日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603 京都市北区小山上総町